

逍遙愛用「小羊」印は、こうして出来た

——市島春城所用「吉羊（祥）」印ならびに大正天皇即位の礼との関係——

馬 淵 敬 子

一、はじめに

二〇一八年春季図書館企画展「新収資料展」⁽¹⁾（以下、本展）では、近年、図書館にご寄贈いただいた資料の中から、早稲田大学に関係の深いものを集めたコーナーを設け、十数点の資料をご披露した。本稿は、そのうちの一つ、「坪内逍遙書簡集…五十嵐力宛」（又六・九四〇四）についての調査過程で明らかになった坪内逍遙愛用の「小羊」印と市島春城所用「吉羊（祥）」印の関係、および「吉羊（祥）」印が作られた経緯について報告するものである。なお、同資料は、本展の目玉として、その図版をポスターにも使用し、会場には、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館より、逍遙愛用「小羊」印の実物および、三村竹清（一八七六～一九五三）が限定十五部で制作した『逍遙印譜』（昭和十年刊）を拝借して、参考展示させていただいた。ここに改めて謝意を表したい。

二、逍遙愛用の「小羊」印について

「坪内逍遙書簡集…五十嵐力宛」は、逍遙に師事した国文学者で本学元教授の五十嵐力（一八七四～一九四七）に宛



図1



印影部分拡大

てられた逍遙の書簡を、昭和十九年、晩年の五十嵐が一卷の卷子に仕立てたもので、十五通の書簡と五十嵐による題辞が貼り込まれた新出の資料である。本展では、このうち三月十四日付の書簡をお目につけた。この書簡は、文中で言及されている五十嵐の新著^②、出来上がり次第進呈する、と追伸に記されている逍遙の訳著^③から、大正五年のものであることが推断される。内容は、五十嵐から送られた新著（前掲）並びに菓子と近況報告への返礼や、自身の近況報告^④といったところで、大学経営に関しても若干言及し、「これは帰京後、お目にかかりて」じっくり相談したいとの言から、この時、逍遙は東京を離れていることが知られる（後述）。

図1に、その末尾を掲げた。図版の中央やや左側に見える「三月十四日朝」の日付の下に、注目していただきたい。羊の絵柄と「小」の文字が組み合わされた正方形の肖生印^⑤が捺され、「こんな印を市嶋氏^⑥から貰ひ候」と書き付けられている。この印章は、逍遙愛用の

の「小羊」印としてよく知られたもので、例えば、逍遙自選の『逍遙選集』^⑤各巻の扉裏には、約八センチ角に拡大した意匠で用いられているし、逍遙協会編『坪内逍遙研究資料』^⑥の各集の表紙も、この印影ひとつを右下に配したデザイン

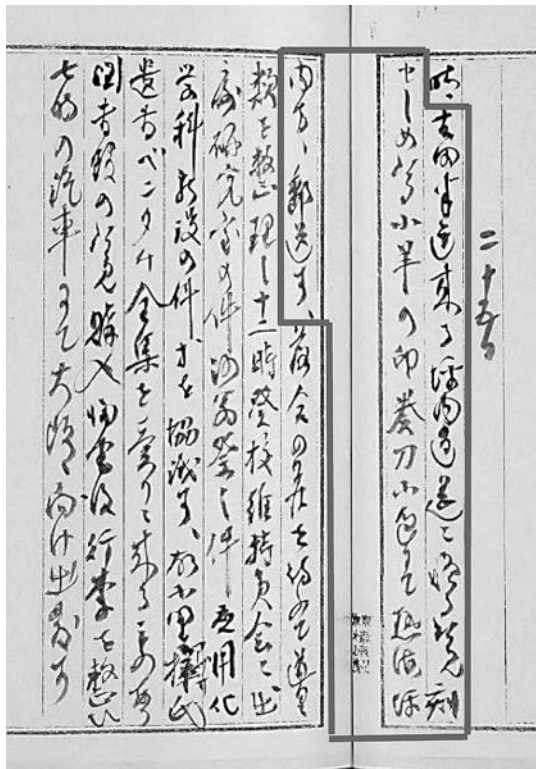


図2

ンを採っている。

また、この印章が、市島春城から贈られたものであることは、春城の『雙魚堂日誌』(以下、『日誌』)によって裏付けられる。⁽⁷⁾ すなわち、二週間ばかり

前の『日誌』大正五年二月二十五日の条⁽⁸⁾(図2 枠線や翻字の句読点は稿者による。以下同じ)に、「(篆刻家ノ) 吉田半迂来る。坪内逍遙に贈るため刻せしめたる小羊の印奏刀、小包にて熱海坪内方、郵送す」と見えるのだ。さらには、これに先立つ同月十七日、逍遙は春城に宛てた手紙⁽⁹⁾の末尾に、「小羊印のた

まもの楽みにいたし候」と記しており(図3)、「小羊」印の制作が、前もって知らされていたことも分かる。五十嵐への書簡からは、贈られた「小羊の印」(以下、「小羊」印)にたいそう満足した逍遙が、機会を捉えてはこれを捺し、嬉々として、誰彼に示していた様子が想像される。

なお、この十七日付の書簡の追伸には「熱海も風ある日は中々料峭の寒を覚え候」と書かれ、また、春城も熱海の逍遙に向けて「小羊」印を送っていることから、逍遙の滞在先は熱海であったことが確認される。

逍遙愛用「小羊」印は、こうして出来た

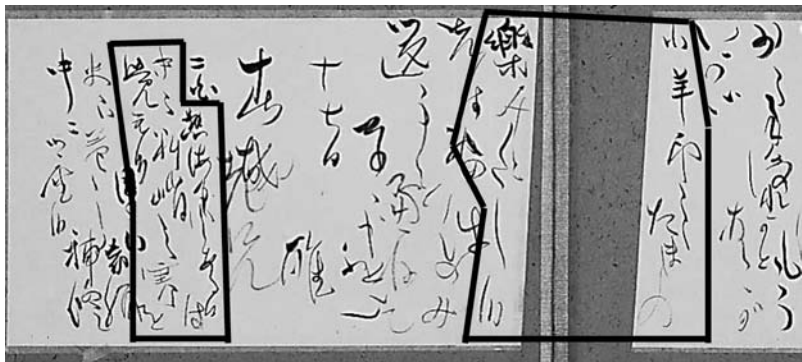


図 3

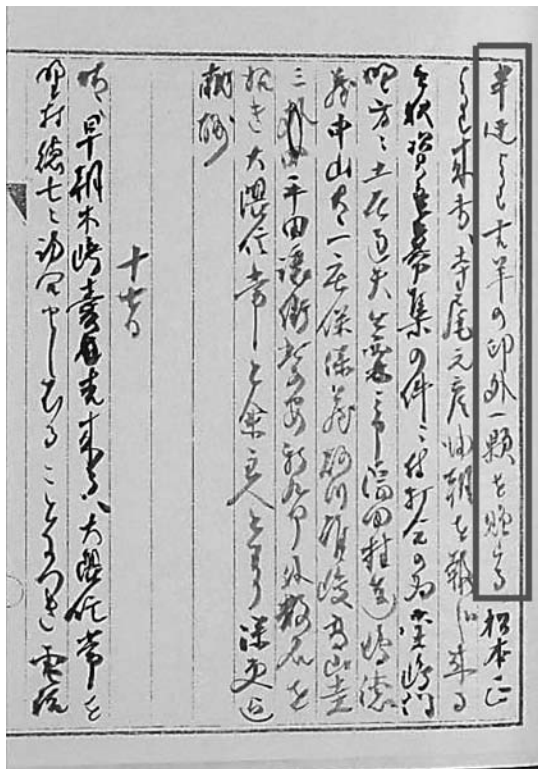


図 4

三、「小羊」印に先立つ「吉羊」印の存在

さて、春城から吉田半迂に「小羊」印の制作が依頼されたのは、いつ頃のことだったのだろうか。その時期を特定したいと考えた稿者は、『日誌』の記述を遡り、その結果、「小羊」印の前に、いわば、もう一つの「羊」印が存在することに気がついた。



図5

すなわち、『日誌』大正四年十一月十六日の条^⑩、これは逍遙に「小羊」印が贈られる約三ヶ月前の記事であるが、この日、春城は吉田半迂から「吉羊の印」を贈られている(図4 枠線部参照)。「吉羊の印」との表現に驚き、試みに何冊かの『日誌』を閲したところ、果たして次巻「大正五年一月以降」の書き出しの丁に、「吉」の文字と羊の絵を組み合わせた印影が認められた(図5)。春城所用の「双魚文庫」印の上に捺されたこの印こそ、「吉羊の印」(以下、

逍遙愛用「小羊」印は、こうして出来た

「吉羊」印に違いない。しかも、この印章の羊の図案が「小羊」印のそれと酷似することは、一見して明らかである。有名な逍遙の「小羊」印に先立って、春城の「吉羊」印が存在したのである。春城は、この印をなかなか良いと思っただけでなく、以降の『日誌』や『雙魚堂日載』（以下、『日載』）の巻四五など数冊に、これを捺していることも確認できた。さらに調べを進めると、この「吉羊」印は、現在、早稲田大学會津八一記念博物館（以下、會津八一記念博物館）に収蔵されており、その印影は、平成二十年に同館より刊行された『市島春城印章コレクション総目録』や、青裳堂書店刊の『春城蔵印¹⁴』にも収載されていることが分かった。制作者は、ともに「吉田半迂」と明記されているが、制作時期は、いずれにおいても特定されておらず、「明治〜大正時代」となっている。制作者は、側款の「田迂」から推定されたのであろう。だが、従来、上述した春城の『日誌』の記述や、次節で見る『日載』の記事等が見落とされ、逍遙の「小羊」印との関係も、あまり意識されてこなかったらしい。

二つの印章のサイズを比べると、「小羊」印が、約四センチ角とかなり大きいのに対して、「吉羊」印は持ちやすく、実用的な約二センチ角である。さらに、會津八一記念博物館で実物を閲覧したところ、「小羊」印が立派な獅子^{ちしよ}の紐を持つのに対して、「吉羊」印の天には何のデザインも施されておらず、印材として切り出されたままの平面であった。このように、同じ篆刻家の手により、相前後して制作された二つの「羊」印は、印面の基本デザインこそ同じであるが、サイズも形状も全く異なり、つまりは印章の性格が異なるように思われる。吉田から春城に贈られた「吉羊」印は普段使いの印、春城から逍遙に贈られた「小羊」印は贈答用の特製印、とでも言おうか。

ところで、『逍遙選集』別冊第三卷附録の「逍遙印譜」は、合計三十四顆の印影を収載しており、これを見ると、逍遙がほかに「小羊」の文字を刻した印章も、複数所有していたことが知られる。愛らしい「小羊文庫」という印章もある。また、この「小羊」という用字自体が、館蔵の「小羊書簡¹⁵」などにも認められ（図6）、本年度、新たに館

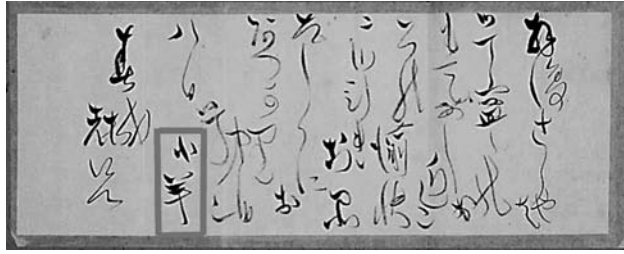


図 6

蔵となった春城制作の逍遙の印譜も、『小羊留蹤』と名付けられている。

さらに挙げると、逍遙の「小羊子が白昼夢」⁽¹⁷⁾は、逍遙が「羊」、あるいは中国風に「小羊子」と綽名されたことを伝えているが、その理由は、逍遙の優しい性格と、生年の干支（稿者注：己未）および文筆活動で羊（稿者注：山羊？）のように紙をたくさん「喰ひ減らしければ」、というのである。

そうした逍遙に、この穏やかで愛らしい羊の印章は、何とも似つかわしい。思うに、吉田から贈られた「吉羊」印に想を得た春城が、逍遙のための「小羊」印の制作を直ちに依頼し、贈り物としたのではないだろうか。

四、「吉羊」印の制作事情とその印文の読み方

このように、逍遙愛用の印章として有名な「小羊」印の前には、盟友・春城所用の「吉羊」印が存在したわけだが、いったいどのような理由があつて、吉田半迂は春城市島謙吉に「吉羊」という印章を贈ったのだろうか。

実は、前節でもふれた『市島春城印章コレクション総目録』は、この印章の印文が「吉祥」と読める可能性を示している（同目録一七七ページ）。會津八一記念博物館主任研究員の下野玲子氏によれば、漢字は偏を取つて使うことがあり、この場合、しめすへんを取つた「羊」（の絵）だけで「祥」を表すのだからという。また、下野氏のご教示によって、平成十年秋に行われた東京国立博物館の特別展「吉祥——中国美術にこめられた意味」の図録を参照したところ、次のような解説がなされていた。（傍線は稿者による。）

逍遙愛用「小羊」印は、こうして出来た

羊は漢代の樽せん（稿者注：焼成した煉瓦のこと）や画像石に時折表わされ、また器物に文様として付けられていることがある。特に後漢時代の盃つ（稿者注：広口の深鉢）の内底には吉祥句などと共に表わされた例が多い。字形からは「祥」と通じて吉祥の意味を持っていたと思われ、鏡や器物の銘文などでは「祥」の代わり用いられることがある。また、発音は「陽（Yang）」と同じであり、ここからもめでたい意味が付与されていた。¹⁸

加えて、以下の背景を考えると、この印章において、羊の文様は「祥」の字の意味で使われているという解釈は、ますます妥当なものと思われる。

すなわち、「吉祥」印が制作されたのと同じ大正四年十一月の十日、大正天皇の即位の礼が、京都御所において執り行われた。本来は前年に予定されていたところ、昭憲皇太后の崩御（大正三年四月十一日）により、一年延期されたこの大礼が、日本国民挙つての盛大な祝賀行事であったことは、春城の『日誌』や『日載』巻四¹⁹（大正四年十月二十四日起筆。なお、以下の『日載』は、この巻を指す）にも詳しく、例えば、春城が東京から大阪へ向かおうとしても、「京都大典に付、数日来、汽車借切りの有様にて、今日より初めて臨時旅客乗車を得たり」（『日誌』大正四年十一月九日の²⁰）という状況であった。時に第十七代内閣総理大臣であった大隈重信は、大典の当日、紫宸殿で寿詞を奏上しており、早稲田大学としても、同年十月に「御即位大典紀念事業計画」²¹を策定。各学科研究室の新設と恩賜館内研究室の新設、そして図書館閲覧室の改築及び書庫増築の三事業のために、資金募集を始めたのだった。

『日誌』・『日載』によれば、春城は、この折に吉田に祝賀の印章を作らせており、同年十一月十二日、大阪滞在中の春城のもとに、二顆の印蛻いんせいが届けられた。印文は、「寶祚無窮」と「聖壽萬歳」²²。『日載』には、郵送された印箋そのものが貼付されて残っている（図7）。刻まれた文字も典雅で、まさに新天皇の即位を祝すにふさわしい印章といえよう。

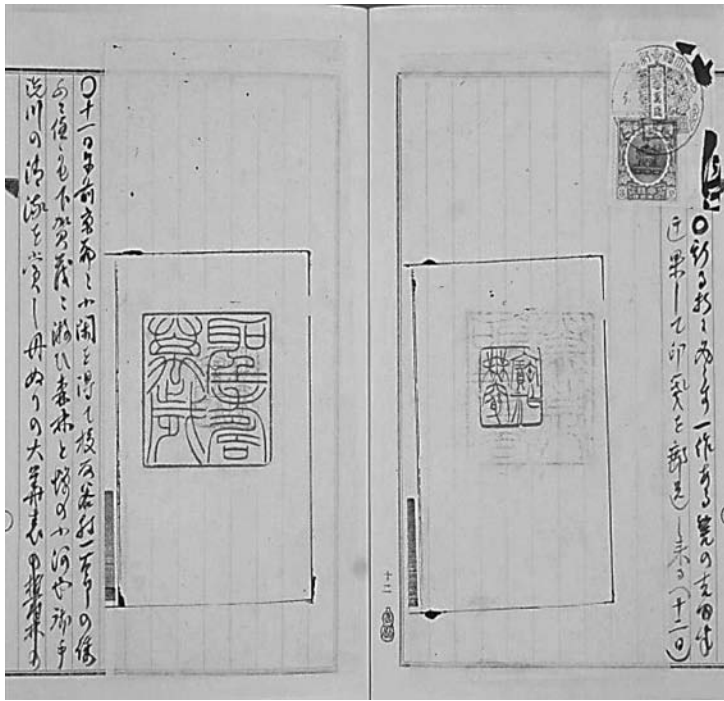


図7

逍遙愛用「小羊」印は、こうして出来た

そして、前述のとおり、四日後の十一月十六日、未だ大阪に滞在中の春城のもとに届けられたのが「吉祥」印であった。「日誌」には「半迂より吉祥の印外一顆を贈らる」（傍点は稿者による。前掲図4参照。）とあるので、これは、春城の指示ないし依頼で制作された上記の二顆とは別に、吉田が自発的に作って春城に進呈したものと思われる。『日載』の第二十五丁裏には、「吉祥」印の印影と「即位大典当日作 吉田半迂所贈」の記載もある（図8）。つまり、大正天皇の即位大礼に際して、吉田は、天皇の即位を寿ぐ個人的な思いから、わざわざ大典の当日を選んで印刀を握り、祝意をこめて「吉祥」の印を刻んだものと推測されるのである。

これらの点を踏まえると、所有者の春城は「吉祥の印」と記しているものの、この印文は、やはり「吉祥」と読むのがよいのだろうか。そ

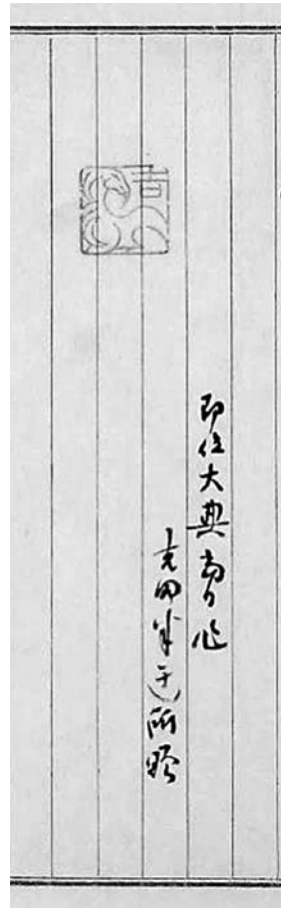


図 8

して、上述のような事情のもとでならば、この印章が春城に贈られたことに、何の不思議も不自然もない。

なお、前節でふれたとおり、『市島春城印章コ

レクション総目録』や『春城蔵印』は、この印章の制作時期の特定に至っていないが、右に見てきたように、制作時期は間違いなく、大正四年十一月である。

五、まとめ

以上のように、逍遙愛用の「小羊」印の成立には、大正天皇即位の礼という国民的な祝賀行事が関わっていた。本稿がこの印章の由来とともに、従来、特別な注意を払われてこなかった春城所用の「吉羊」印に、光を当てることができたとすれば、幸いである。

注

(1) 二〇一八年三月二十三日から四月二十六日まで、早稲田大学総合学術情報センター二階展示室にて開催。

(2) 『高等女子新作文』（大正五年五月 大日本図書）。書簡中では「新作文」とされている。次注『マクベス』とともに、特別資

料室の小池直氏のご教示による。

- (3) 『マクベス』(大正五年三月 早稲田大学出版部)。
- (4) 逍遙は、「例の世界史に悩まれ、自ら求めてドンタクなし」と多忙を嘆いているが、この「例の世界史」とは、逍遙が監修に携わった『通俗世界全史』(全十八巻 大正四年～昭和二年 早稲田大学出版部)のことと思われる。
- (5) 全十二巻、別冊第一～三(大正十五年～昭和二年 春陽堂)。
- (6) 第一～十六集(昭和四十四年～平成十年 新樹社)。
- (7) 図書館資料管理課長(当時)の小林邦久氏のご教示による。
- (8) イ四・一九一九・五六九。なお、『雙魚堂日誌』の解読には、春城日誌研究会の「翻刻『春城日誌』(二四)」(早稲田大学図書館紀要)第五十四号 平成十九年三月)、及び「同(二五)」(「同」第五十五号 平成二十年三月)を参考にさせていただいた。
- (9) 『坪内雄蔵書簡・市島春城宛』(チ六・三八一三・一二九)。日付は年月を欠くが、『坪内逍遙書簡集・逍遙新集』第二巻(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 逍遙協会編 平成二十五年三月 早稲田大学出版部)は、内容から大正五年二月のものとして推定。これに従った。なお、この書簡は、春城が自らへの来信を集めて貼り込んだ『朋盃手束』二帖(チ六・三八一三・一～二)のうち「乾」に収められている。
- (10) イ四・一九一九・五六八。
- (11) 注(8)に同じ。
- (12) イ四・一九一九・二九四。
- (13) 『市島春城印章コレクション総目録』への収載とともに、戸山図書館担当課長の藤原秀之氏よりご教示いただいた。
- (14) 日本書誌学体系八十八 平成十四年十月刊。
- (15) 「小羊書簡」の存在は、特別資料室(当時)の本木洋子氏にご教示いただいた。このタイトルの館蔵資料は二通あるが、ともに春城宛で、署名は「小羊」である。二通とも、注(9)に記した『朋盃手束』に貼り込まれており、一通(図6)は年月不詳「八日」付。内容はごく単簡で、前夜のもてなしの礼と、「お品」は確かに預かったとの記述のみ。もう一通は「一月廿四日」付で、『坪内逍遙書簡集・逍遙新集』第二巻(注9に同じ)は、大正十三年のものとしている。春城が修善寺から出した葉書と封書へ

逍遙愛用「小羊」印は、こうして出来た

の返信で、同書の注記によれば、数日前、熱海の逍遙を高田早苗や春城が訪れており、その際に撮った記念写真への書き付けのなどを記している。

(16) この印譜（チ一〇・四六二〇）は、昭和四年一月の制作で、「小羊」印を含む計五十顆の印影を収める。巻頭には、年明けて七十一歳になった逍遙の長寿を祝う題辞「寿同金石」が、春城によって揮毫され、また、「小羊留蹤」とする題簽の右下にも「春城署」とある。

(17) 『逍遙選集』別冊第三巻所収。明治二十五年二月稿・中断。

(18) 「吉祥——中国美術にこめられた意味」（平成十年十月 東京国立博物館）第二章「除去不祥——古代の吉祥」八十四ページ。また、同図録の巻頭序説・概説においても、高浜秀氏「中国古代の吉祥文」が、同様の解説をなさっている。

(19) イ四・一九一九・二九三。大正天皇の即位の礼に関連する事柄が、首相大隈重信の動きを中心に、新聞記事や掲載された写真の切り抜きなども交えて、記録されている。

(20) 注(10)に同じ。

(21) ト一〇・二七三〇。

(22) 印文の読みは、同前・小林邦久氏および同・小池直氏のご教示による。

(23) 同前・藤原秀之氏のご教示による。

補

本稿では「小羊」印の制作者を吉田半迂として述べてきたが、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館が所蔵する會津八一手捺の『逍遙印譜』には、なぜか「作者不明」と記されている。吉田は逍遙の印章をいくつも刻んでおり、また、同じ印箋の上分に捺された別の印影について、八一はそれを「吉田半迂作」と明記しながらも、この印の作者は不明としているのである。

本稿で述べたとおり、『雙魚堂日誌』大正五年二月二十五日の条などから、この印章を吉田の作と認めることに特段の困難はない。『逍遙選集』別冊第三附録の「逍遙印譜」や、『坪内逍遙研究資料』第一集に載る表紙の解説文も、同じ見解である。そもそも、『逍遙選集』別冊第三の「逍遙印譜」の原稿は、逍遙が「ベタ押し」にして八一に届け、その「取舎」を託したもので、八一は、逍遙からその校正刷も渡されて、「何卒萬般よろしく」と一任されている（柳田泉・長島健編『坪内逍遙 會津八一往

復書簡』昭和四十三年十二月 中央公論美術出版 三三九～三三〇ページ)。その「印譜」では制作者を「吉田半迂」と明記しておきながら、自ら制作した『印譜』で「不明」としたのは、八一の単なる思い違いであろうか。あるいは、何か不審でもあったのか。何とも不可思議ではある。

本稿の執筆に際しては、『雙魚堂日載』の存在および「吉羊」印の所在をご教示下さった藤原秀之氏と、「吉羊」印の閲覧にご高配下さった下野玲子氏に、たいへんお世話になりました。あらためて謝意を表します。

(まぶち けいこ 特別資料室)

逍遙愛用「小羊」印は、こうして出来た